

「なぜ、山に登るの？」
「そこに山があるから」
では、「なぜ、絵を描くの？」
「？」

読者のみなさんの答え如何？
芸術とは繊細な感性と創造性、情熱が生み出すもので、最先端の科学でも解き明かすことはできないと考えられている。しかし認知科学の発達がいっつかのヒントを与えてくれる。

『ヒトはなぜ絵を描くのか——芸術認知科学への招待』（齋藤垂矢著／岩波科学ライブラリー）では、いくつかの科学的分析が紹介される。まず人の文化や技術とは、脳の器質的な構造などの生物学的な進化によるものではなく、

祖先から受け継がれた知識の積み重ね、いわば「知の遺産」だと考えられているという。そこで人間に近いチンパンジーと人の幼児の行動を比較する。描くためには運動能力や知性が必要だが、幼児が発達のどの段階でこれらの能力においてチンパンジーを超えるかを見るためだ。

絵を描くには、まず物（筆記具）と物（紙）とを関連付ける「定位操作」という能力が必要になる。これにはかなり高度な知性が必要で、それができるのは霊長類の一部に限られる。5才のチンパンジーは、人の1歳児のなぐり書きのようなことはできる。ところが表象、つまり何か具体的なモノの形を描くよ

うになるのは、人の子は3才くらいだが、チンパンジーにはそれができない。何故か。

表象を描くには単なる「なぐり書き」ではなく、思ったようにモノの形（描線）を描くという「運動調整能力」が必要なこ

人はなぜ絵を描くのか

とは言うまでもない。しかしより重要なことは、そこには何を描くかについて頭の中に「イメージ」がなければならぬということなのだ。そしてそのイメージをつくり、紙の上に再現するには、見たものをカテゴリー化し、シンボルに置き換えて記憶しておくき、それを情報として記憶から取り出すという作業過程が必要になる。人は見たものを「コピペ」してそれを紙に映し出すことはできない。

これはすなわち世界を記号化してとらえる能力、つまり言語能力と密接に関係する。だからこそ、目の前にないものや、想像したものを描くこともでき

る。絵は言葉にできないものを表現できると考えられているが、実は言語能力が背景にあって初めて絵を描くことができるのだ。人が描くということとは、目の前にあるものを「写す」のではなく、その人がそれについて持っているイメージを描くに過ぎない。

では初めの問にもどろう。人は「何故」絵を描くのか？それは頭の中にあるイメージを外化する過程で、新たなイメージが湧いたり、他のイメージと組み合わせられて実在しないものを作り出すことができるという発見、創造の喜びである。さらに人には社会的な動機がある。頭の中にあるイメージを他者に伝え、共有すること、つまり絵を介したコミュニケーションは大きな動機付けとなるのだ。

それは即ち絵を見るものについても言える。ある作品を見るとき、我々はアーティストのフィリターを通して抽出された新しい見え方に出会い、感動する。作品と出会うことは、それに刺激されて自分の知識や記憶を探索することにもなる。アートは、それを制作する人だけでなく、鑑賞するひとに対しても創造的な作業をうながすものなのだ。

先行き不透明な今の時代にこそ、こうしたアートのもつ力が生きてくる。